

三石神社 (みついしじんじや)

御祭神 神功皇后 応神天皇 天照皇大神 素盞男大神

由緒 創立の年月は不詳、古くは往来神又は雪気神と称していたが、後世三石大神に改称すると伝えられる。

神功皇后摂政元年(西暦二〇一)二月、三韓より凱旋の途、務古の水門に上陸し(務古水門は今和岬より駒ヶ林までの湾曲した海浜の総称、中世には大輪田の泊と称する)神誨を得て、この所に三箇の石を敷き祓所を設けて、厳かに祭儀を執り行ない、各斎主に託して廣田、生田、長田、住吉の神を、其の神誨の地に祀らしめ、遺跡を祓殿塚又は三石と称する。

推古天皇十年(六〇二)二月、新羅を撃たんとして舟師をこの津より出発するに当たり、神部に勅して、祓所の遺跡に神功皇后の神霊を祀りて戦勝を祈る。

天平年間(七三〇頃)僧・行基、務古の水門である和岬泊を興し、海路の安全を計りし時、神功皇后の神霊、行基に誨へて曰く、吾は往来の船を守らんと、茲を以て土工畢るの後、祓所の旧跡に祠を建て大輪田泊の鎮護とし、神号を往来神と称す、後に雪気神とも記す。これ即ち当社の創始である。この時一夜にして一株三幹の松が生じたため、この地を三本松とも称する。

弘仁三年(八一二)朝廷使を遣わして大輪田泊を修復した際、当社も修理され、承和三年(八三六)五月、正六位上、貞観元年(八五九)三月、従五位下の神階を授けられる。

その後の兵乱により当社は再び荒廢するが、文祿二年(一五九三)時の代官・南條新左衛門尉が社殿を再建して、雪気神を三石大神と改めた。

享保七年(一七二二)七月、兵庫の人・井上八郎右衛門、幕府の許可を得て、和岬の地を開拓して、今和岬新田村の一村を設けるに当りて、村瑞の美地に社殿を奉遷し、この時更に天照皇大神及び、素盞男大神を配祀して産土神と崇め、農事の豊穰も祈願した。

文化四年(一八〇七)六月、社殿破損に伴い、地本井上八郎右衛門、村民と協力して社殿を村の中央に奉遷し、社殿も改築した。

明治三十九年(一九〇六)十一月、時世の推移に伴い、境内地は三菱神戸造船所設立に伴う山陽鉄道和田支線の敷設のため、官の裁可により現在の地に遷座した。

大正九年(一九二〇)御祭神である神功皇后一六五〇年の年式に相当する記念事業では、三菱神戸造船所の多大なる奉賛と氏子及び崇敬講社の協力により社殿を改築し、十一月十九日より二十一日までの三日間、式年大祭を斎行した。

昭和二十年三月の神戸大空襲により社殿等は鳥有を帰すも、氏子崇敬者をはじめ諸会社の奉賛により昭和三十八年に正遷宮を奉仕したのが現今の社殿である。

平成五年十一月、平成の御大典事業として玉垣・参道・社務所等を改修竣工したが、平成七年一月十七日の阪神淡路大震災により社殿は元より鳥居等の石造物をはじめ社務所に至るまで被害を被ったが、いずれも厚志ある氏子崇敬者や三菱神戸造船所・三菱電機神戸製作所をはじめ各企業の奉賛により逸早く復興し現在に至っている。

祭日

例大祭 五月十七日に近い土・日曜日

日曜日午後からの神幸式には、猿田彦をはじめ神宝持少年行列・神輿行列を執り行なう。

夏祭 七月十七・十八日(夏越しの祓い・茅の輪くぐり神事)